

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	岡内 三眞
論文題目	東アジア青銅器文化の展開
<p>本論文は、東アジアの青銅器文化の起源と展開を、広く中国東北部、朝鮮半島、日本列島を舞台に論じ、国家と民族の垣根を越えて東アジア諸地域に伝播し展開した青銅器文化について、年代的位置づけを厳密に論証しながら、諸地域の並行関係や文化・歴史的脈絡を考察したものである。結果的に東アジアを舞台とした青銅器を巡る広範な技術的交流を明らかにすることを目的としている。本論文は全Ⅴ章から構成され、Ⅱ章（１～５）では主に中国東北部、Ⅲ章（１～５）は朝鮮半島、Ⅳ章（１～８）は日本について論じる。</p> <p>Ⅰ章において東アジアの初期銅器が自然銅を採集して加工した中原の仰韶文化にはじまり、龍山文化で青銅合金を鑄造し始める経緯について述べ、続く二里頭文化期（夏王朝）で複合范による容器が作られ、商（殷）の青銅礼器へと継承される経緯について述べる。中国東北地区で青銅製品が出現するのは紀元前 12 世紀の商代併行期で、西北朝鮮へは紀元前 11 世紀に刀子、鑿などが伝播し、紀元前 9 世紀初に遼西（遼河以西）から銅剣などとその製作技術が導入された事実を確認する。</p> <p>本論の主体を占める「東方式銅剣」の成立過程と展開について、淵源を前 2000 年紀の北方草原地帯のカラスク文化に求め、遼西地区で一鑄式有柄銅剣の系譜から組立式有茎曲刃銅剣が成立し、南山根などで製作され始めて東北地区各地で鑄造が始まったとする。この青銅器文化・技術の普及と東方への伝播は、遼西、遼東、朝鮮西北部、朝鮮西南部に至る過程で辿ることができ、岡内氏は海上ルートをも含む伝播を考える。</p> <p>紀元前 9 世紀に朝鮮半島では支石墓などから古式組立式銅剣などの青銅器が出土しており、岡内氏は遼西から工人の移動により銅剣や銅斧、多鈕粗文鏡などの生産が始まったと推定する。銅剣の型式比較では、朝鮮半島の松菊里遺跡や金谷洞遺跡の古式組立式曲刃銅剣（AⅠ式銅剣）は、型式学的に見て、また銅斧鑄型や銅鑿・銅鏃などから見ても遼西の十二台営子タイプと併行すると推定する。岡内氏の型式観に基づく編年の並行関係は妥当であり、組立式銅剣の拡散と伝播・受容の関係、および朝鮮製細形銅剣の年代観を考察する上で大変重要な位置を占めている。</p> <p>岡内氏は、朝鮮ではAⅠ式銅剣から変化した龍興里タイプのAⅡ式段階になって遼西と差異をもつ青銅器が現れ、いくつかの地方色が出現したと説く。BⅠ式の朝鮮独自の細形銅剣が出現するのはそのような地域性の確立と連動し、さらにBⅡ式への過渡期には、多鈕粗文鏡から多鈕細文鏡への移行、朝鮮半島西南部の異形有文青銅器などの出現と展開などが関連し、朝鮮半島における独自の青銅器技術・文化の発展が認められると説く。その時期は異形有文青銅器を伴う一群が、中国東北地区の十二台営子遺跡、鄭家窪子遺跡などとの海上ルートを通じた交流によると想定されるから、BC475 年を遡ることはなく、下限はBC320 年以前に措定した。また八珠鈴や環頭鈴、双頭鈴などの出現をBⅡ式細形銅剣が定着した時期で、細形銅矛や銅戈の出現以後とみなしBC330 年～220 年頃に位置付けている。</p> <p>このように、朝鮮製細形銅剣は、上述のごとく遼西、遼東の組立式曲刃銅剣から変化して紀元前 500 年ころに登場したものであるが、朝鮮半島で独自に発達し、細形銅剣そのものは朝鮮半島内で地域差をもち型式変化を繰り返しながら紀元後まで作られ続ける。</p> <p>それ以降の朝鮮青銅器の年代推定については、中国河北省にある戦国時代の燕の都城跡、燕下都の墓出土の朝鮮半島製細形銅戈の年代を紀元前 3 世紀中葉に位置づけ、細形銅剣にともなう朝鮮独自の車馬具を紀元前 2 世紀ころの衛氏朝鮮前後の時期に比定し、楽浪郡設置以降、木槨墓で細形銅剣と共伴する前漢時代の鏡（前漢鏡）により年代を比定する。</p> <p>このような大陸側の年代から考察すると、朝鮮細形銅剣文化の日本列島への伝播は、早くても紀元前 320</p>	

年以降、朝鮮半島で銅剣、銅矛、銅戈のセットが揃う大谷里遺跡や九鳳里遺跡の時期に位置づけられる。

それ以前に日本列島には朝鮮半島南部から初期青銅器（福岡県今川遺跡の A I 式銅剣転用鏃・鏃）が弥生時代前期前半に伝わるが、本格的伝播は前期末の朝鮮製細形銅剣・銅矛・銅戈・多鈕細文鏡・小銅鐸からであり、北九州を中心に製作されて拡散し、独自の分布圏を構成する。しかしほどなく朝鮮半島の青銅器文化とは一線を画して、倭製青銅器文化を展開するに至る。北九州では大型の青銅祭器を作りはじめ銅剣、銅矛、銅戈などの武器形祭器として発展し、近畿地方では大型化した銅鐸が盛行するなど日本独自の発展をするに至る。

岡内氏の論考は、これら中国、朝鮮半島、日本列島の技術交流をもとに、丹念に遺跡間の年代を繋ぎ青銅器文化の東方伝播を論証したものであるが、その手法を根底から支えるのは遺物の詳細な観察と共伴関係の検証である。岡内氏は、考古学的資料の収集にあたり、自ら中国東北地方の遺跡、朝鮮半島各地の遺跡に足を運び、出土資料の計測や記録を行い綿密な型式分類を行っている。その成果は個別の論文として発表され、日本と韓国の学界ではその信頼性が高く評価され多くの論文に引用されている。

中国の燕下都出土銅戈を朝鮮半島製であると認定し、朝鮮半島の古式車馬具と秦の始皇帝陵例などとの共通点を指摘したのは岡内氏である。また、朝鮮半島南部で出土した銅矛や銅戈の中に倭製品があり、北部九州との年代上のクロスチェックが可能であることを指摘した点、古墳時代の畿内大和の石製腕飾りや鉄剣・鉄刀の鹿角製装具が朝鮮半島南部から出土する点を認めたのも岡内氏である。

本論文は、岡内氏が長年にわたり精力を傾注した東アジア青銅器文化研究の総括といえる論考である。氏の研究の特徴は、主に日本の弥生時代青銅器について、最も妥当な年代観と系統観を与えるために、広く中国大陆と朝鮮半島の先史時代と関連させて把握する手法に結実している。その視点は遺物の厳密な比較研究により、地域ごとの年代的並行関係を導き出し、文化の伝播と受容を明らかにする視点である。それだけに編年作業は不可欠な手続きである。岡内氏の研究は、まず遺物間に存在する型式差と共伴関係より、遺物間の新古関係と系統関係を導き出し、それに基づいて編年的枠組みを構築することから始まる。続いて地域ごとの実態に即した型式編年を確立し、地域間の連鎖を徐々にたどりながら、最終的に広域編年網を構築することによって完成する。本論文を貫く手法は、一見、迂遠な研究方法のように見えるが、実は最も確実で正当な考古学的方法である。研究の進展した現在の状況からすると、岡内氏の位置づけには若干の修正と加筆を要する点もあるが、多くの点で輝きを失っていない。常に学界をリードし、日本のみならず、広く韓国の研究者にも大きな影響を与え、大陸と日本列島の関係について新たな視点を提供してきたことは高く評価される。以上、本論文は博士学位論文に値すると判断される。

公開審査会開催日	2013 年 3 月 30 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏 名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		高橋 龍三郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学) 早稲田大学	李 成市
審査委員	早稲田大学文学学術院・客員教授	博士(文学) 東京大学	後藤 直